



Abstract

The aim of this paper is to describe 1. how media, especially mobile phones, have been utilized in child-rearing practices, and 2. how the process of adoption influences the placement of techno-social networking, the construction of family relationships and home environment, and the identity acquisition of actors who are related to the child-rearing practices. Furthermore 3. by incorporating the result of this study, this paper will reconsider the model of media consumption among family members and the home environment.

In order to get coherent and precise contextual data embedded in the day to day domestic family relationships, data has been collected by using in-depth ethnographic methods such as semi-structured interviews, communication diaries and field observations in the informants' homes.

As a result, the following two observations are examined. 1. The parent's personal social network constructed by mobile phone communication plays an important role in the acquisition of parental identity during the child-rearing period. 2. the Cultural/historical background of one parent's personal social network constructed by mobile phone communication reduces the accessibility of the other parent into the child-rearing practice.

Child-rearing is a practice that goes beyond the ready-made family relationship or home environment. With this point of view, in mind, this paper hopes to introduce the concept of "community of practice" into the model of media consumption among family members and home environments.

[キーワード] 携帯電話(ケータイ)、育児ネットワーク、アクターネットワークセオリー、家族/家庭

Media Consumption at Child-rearing and Constructions of Families / Family Environments

天笠 邦一 / Kunikazu Amagasa (慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 後期博士課程)

1. はじめに
2. 先行研究と問題意識
3. 調査概要
4. 調査結果と考察
5. 結論
6. 議論

1. はじめに

本論は、携帯電話(以下ケータイ)を始めとする新たなメディアの普及が、家族/家庭の構築にもたらした影響の理解を、個別具体性を重視した仮説探索的な調査によって試みるものである。

近年、様々な新しいメディアが社会への普及を果たしてきた。新たなメディアの普及は人々の生活に大きな影響を与える。本論では、人々の生活に大きな影響を与えたメディアとして特にケータイを取り上げる。ケータイの契約数は、2007年3月現在で9500万台強[1]に及び、近年普及したメディアの中で最も人々の生活の中に溶け込んだ存在となりつつある。ケータイの普及と受容に関する研究は、普及が始まった当初は、アーリーアダプターであり既存の社会的枠組/制度の破壊的受容者であった若者の利用を焦点[2][3]に行われてきた。しかし、近年上記のようなケータイの日常化に伴い、家族や家庭などより日常的な領域に対しても研究が進んできている。このような日常的な領域におけるケータイの利用は、その状況に高度に練りこまれた存在であり一面的な理解は難しい。しかし、既存の研究の多くが「家族関係の希薄化」の賛否の議論[4][5]に代表されるように、ケータイ普及/利用による家族メンバー内の社会的関係性の質的变化を論じたものであり、何がどのように変化したのか、なぜどのように利用するのかという受容/利用のプロセスの詳細な理解に欠けていた。

以上の問題意識に基づき、本論では、家族/家庭という日常的な領域におけるケータイを中心としたメディア利用の文脈をより詳細に記述し、それを解釈する。以下では、家族/家庭という日常的な領域における実践の中でも、特に「育児」に着目し、その中におけるケータイの利用を焦点に議論を行っていきたい。

2. 先行研究と問題意識

2.1 ケータイと育児/育児ネットワーク

育児は、社会制度的観点から見ると、現代の家族に要求されている最大の社会的機能[6]であるといえる。ゆえにその実践に参与する者が共同体の内外からうける期待値は大きく、その実践に従事する為の経済的/空間的/時間的コストは多大なものとなる。しかし、育児実践に従事する時期は、一般的に「親」としての役割獲得だけでなく、男女間の愛情を前提とした夫婦としての自己実現や、仕事上での自己実現、個人としての自己実現を同時並行的に果たさなければならないライフステージでもある。育児期は、家族という共同体の観点から見ても、それを構成する個人の観点から見ても、最も多層的な役割を果たすことが期待され、それぞれの役割を果たす上で最も利用可能な経済的・空間的・時間的資源が限られた時期であると考えられる。

このような育児に関する高度な負荷を軽減するものとして、近年「育児ネットワーク」の効用が注目を集めている。落合の先駆的研究[7]に始まり、厚生省人口問題研究所[8]などもこうした育児ネットワークによる人的/情緒的サポートの側面を強調してきた。松田は、こうした育児ネットワークのあるべき姿について、「父親の育児参加が多く、親族の割合と密度が中程度で、世帯外の育児ネットワークの規模が大きい時、育児不満度が低く、生活満足度が高い」[9]とまとめている。すなわち育児において家庭外部に存在するネットワークは大きな役割を果たすのである。宮木[10]は、この外部ネットワーク(ママ友)の維持の手段としての通信メディアの重要性に着目した調査を行い、母親たちの積極的な活用を確認した。この調査ではケータイでのメール/通話、パソコンでのWEB閲覧/メールいずれも7割以上の高い利用率であったが、その中でもっとも育児に適しているとの回答が多かったのが、ケータイでのメールである。土橋[11]も指摘するように、ケータイは同時平行的に行われる家事の合間に利用できる意味で(パソコンだと設置場所にその都度行かねばならない)家事労働との親和性が高い。更に言えば、ケータイは、対面志向の強い[10]育児ネットワーク内で、その対面の(実際に会う)機会の調整を行う為の最適の道具となっているとも考えられる。以上のように育児実践内でのケータイの利用は、単なる夫婦間での連絡や知識獲得に留まらない。リアルコミュニティとの接点という特徴を持ち、育児において重要な役割を果たす。

しかし、ケータイの育児実践内での利用は、同時に1つの問題を引き起こすとも考えられる。ケータイは物理的にも文化的にも高いモビリティを持ち、一つのメディア上に複数の文脈を持つ。ただでさえ、同時平行的に複数の役割獲得/自己実現を果たさなければならない育児期に、ケータイによってその複数の文脈を父親/母親が「常に」持ち歩くことになるのであれば、日常生活の各所で役割の変化や衝突や交渉が流動的に発生することになると考えられる。しかし、上述した育児ネットワークに関する先行研究では、女性が育児の担い手であり、それを助ける夫/親族がいて、更にそれをサポートする地域社会があるといったように、階層的で固定的な育児の構造に関する理解が前提として存在するのみである。流動的な状況や役割構築を引き起こすケータイの利用を前提とした育児実践を理解する枠組みとして、このような固定的構造は果たして十分に機能しうるのだろうか。本論では、育児実践内のケータイ消費のプロセスを詳細に理解する事で、育児をめぐる社会的構造の変化にも目を向けてみたい。

家族内でのメディア消費の理解を図るには、育児期は特殊な時期過ぎるのではないかという批判もあるだろう。確かに、育児期は特殊な時期である。しかし、現代家族の要素が凝縮された時期でもあり、そのスタートラインでもある。ゆえに育児を調査対象とするのは、現代家族の構築を考える上で有意義だと考える。

2.2 家族/家庭におけるメディア/テクノロジー消費

家族や家庭といった日常的な領域におけるケータイ以外のテクノロジーの利用に関しては、これまでも数多くの研究が行われてきた。ワックマン(Wajcman [12])は、初期の家庭内のテクノロジー利用に関する研究を、1.工業化の結果生産されたテクノロジーが家庭内に導入される事で、家庭外から提供されていたサービスがテクノロジーを利用した家庭内のセルフサービスに置き換わるとするポスト工業化論の議論 [13]、2.愛情表現としての家事労働を家庭内へのテクノロジーの導入が再生産し、家庭内における性役割の不平等が拡大するとするフェミニズムの議論 [14] [15]、以上の2つの流れに整理した。これらの議論は、それまでブラックボックスとして扱われてきた一般家庭内のテクノロジーの生産/消費活動を学問上の枠組みに乗せ、再評価し、議論の対象とする上で大きな役割を果たしたといえる。一方で、これら初期の研究成果には、言外に公的な領域としての経済/社会システムと、それに従属する「私的領域」としての家庭空間という二項対立的枠組みが存在している。その中で描きだされていたのは、公的社会の変化/技術的革新により変化がもたらされる私的領域としての家庭/家族であった。しかし、公的社会で形成された技術は、このように一方的に私的領域の構造を決めるものではない。フィッシャーがアメリカにおける固定電話の普及過程の研究 [16]で示しているように、私的領域での利用の中で形成された意味が、公的領域における技術全体の意味を変革することもありえる。シルバーストーンら(Silverstone [17])は、このようなメディア/テクノロジーの利用における私的領域と公的領域の相互関係を家庭内のテクノロジー消費モデルとして規定した。シルバーストーンは、テレビの視聴研究 [18] [19]の中で発展してきたメディア/テクノロジーの意味を構築する文脈としての家庭/家族という概念の拡張を行い、そして、1. 公的世界で生産されたテクノロジーは、家庭内の利用/設置によって「ドメスティケーション」すなわち家庭内独自の意味を付与され「消費」される。2. その付与された意味は、家庭内での表出/利用を通して改変/維持/再生産される。3. 構築された意味が家族の構成メンバーの公的領域における活動により公に流通する、というサイクルを提案したである。

本論では、上述した社会と技術の相互構築、公的領域と私的領域の連続性を前提とするシルバーストーンの議論を下敷きとして、批判的に検証しつつ議論を進める。ケータイというメディアは、家族/家庭外への接続性という意味でこれまで家族/家庭に導入されてきたテクノロジーと異なる性質を持っている。このことを鑑み、高い外部との接続性とパーソナル性を持つケータイの消費にも既存のモデルが適用可能か検討を行いたい。

3. 調査概要

3.1 リサーチクエスト

以上の問題意識を元に、本論では個別具体性を重視する仮説探索的手法を用いて以下の2点の理解に努める。

1. ケータイによって構築される育児実践における家庭も含めたネットワークの布置とその背景にある文脈。
2. 様々な自己実現が多重化した育児実践の中で、家族のメンバー(主に夫婦)が衝突や交渉をマネージし、夫婦として親として家族としてのアイデンティティを構築しているプロセス。

3.2 調査手法

本論で用いられるデータは、家庭内におけるケータイの消費をテーマに、2005年8月から実施され、現

在も進行中である筆者が行ったエスノグラフィックな調査で獲得したデータの一部である。本調査は、育児に留まらず家庭/家族におけるケータイの利用を伴う活動/実践全般を対象に行われた。調査者はインフォーマントとなった12家庭に対し、各々の家庭を訪問の上、ケータイの利用やライフスタイル、社会関係に関する1時間30分程の半構造化インタビューを12歳以上の各家族メンバーに行った。インタビューの様子は録音機器に録音され、文字起こし後、分析の対象となった。加えて、家庭内のビデオ撮影や、インフォーマントの手による家内部の地図の執筆、家庭内の参与観察(家庭訪問時間内の短時間)など、可能な限り家庭内の記録に努めた。

第一回目の調査後、調査データの探索的理解から家族と外部コミュニティとの関係性に注目した。この点の更に詳細な理解を得る為、特徴的な外部との関係性を持ち、追加調査が可能であった6家庭に対して追加調査を行った。ここでは、更に詳細なメディアの利用と家族/家庭の構築に関する記述を行う為、文脈理解の助けとなるケータイの利用履歴の記録(コミュニケーションダイアリー[20])を依頼し、半構造化インタビュー時の資料とした。

3.3 インフォーマント/利用データ

この調査でインフォーマントとなったのは関東地方在住の子供を持つ12家庭である。就労形態・収入状況にばらつきが出るようリクルーティングを行った。インフォーマントとなった12家族のうち、幼児のいる家庭は5家庭であり、その中で外部コミュニティとの関係性が特徴的であった3家庭を中心に本論では記述を進める。下記の表-1に、記述の中心となる3家庭の基本属性をまとめた。なお、本論の中で扱われる氏名は、個人情報保護の観点からすべて仮名であり、その他の情報に関しても個人や家族が特定不能な形でデータを開示している。

	夫婦の構成	子どもの構成	就労形態	世帯年収	居住形態
小川家	夫 - 俊輔 : 30代前 妻 - 優子 : 30代前	2名: 0, 3歳(男性)	夫 : 研究者 妻 : 専業主婦(産休中)	600万円台	持ち家 二世帯住宅
岡田家	夫 - 雄也 : 20代後 妻 - さやか : 20代後	1名: 0歳(女性)	夫 : 会社員 妻 : 専業主婦	300万円台	借家
内田家	夫 - 一彰 : 30代中 妻 - 由香 : 30代中	3名: 2, 4, 6歳(女性)	夫 : 教員 妻 : 教員	900万円台	持ち家 二世帯住宅

表-1 記述の中心となるインフォーマント3家庭の基本属性(年齢は最終調査時)

4. 調査結果と考察

以下では、上記の3家庭のケータイ利用/育児実践について、それぞれ詳細な記述を行うものとする。

4.1 小川家の事例：育児に専念する妻とケータイでなる「母親」

小川家は、都心から一時間圏内にある郊外都市の二世帯住宅(玄関別)に暮らしている。夫の俊輔は30代前半の研究者で、同じく30代前半の妻の優子は現在3歳と0歳の男の子の育児と家事をこなす毎日だ。優子は産休中で、家が生活の基盤となっている。一方俊輔は、論文の執筆等などで忙しく、関係先の大学と自宅とを自家用車を使って行き来する生活である。小川家には2台自動車があり、車がないという理

由で行動は縛られることはない。俊輔は在宅作業も可能だが、最近はその賑やかさも、よい作業環境を求めて大学の研究室で仕事に打ち込むことが多い。俊輔には家に独立した部屋もある(妻は寝室の納戸を自室代わりに使っている)。基本的には妻が家の管理はしているが、自室だけは俊輔が自己管理をする。初回調査時は、冷房が効く部屋がリビングしかなかった為、自宅での仕事はリビングで行っていた。しかし、その後は自室にて仕事を行う機会も増えたと語っていた。夫婦の外出時の連絡手段は、主にケータイのメールで内容は事務的なものがほとんどだ。緊急時だけケータイの通話を行う。優子にとって、俊輔とのメールは1日のメール量の1、2割である。俊輔/優子の双方にとってメールに対するレスポンスビリティはそれほど高くなく、緊急時以外、返信が遅れてもあまり気にしていない。これらのことから、俊輔の仕事領域は、比較的家族や家庭といった領域から切り離されている様子が見て取れる。一方で、俊輔は仕事の方に注力している訳でもない。優子は「(子育てや育児に)よく協力してくれる」と語っており夫の家事/育児への参与も確認できる。しかし、この参与は、あくまで家事/育児の主要な従事者としての優子の存在が前提となったものである。優子は、俊輔の協力について、風呂掃除とゴミ捨ては「いるときに」「やってくれたりする」もしくは、自分が体調を崩したときに「こっそりしてくれる」と語っており、俊輔の家事/育児への参与は優子の補完的な側面が強い。このような明確な家事/育児と仕事という役割分担とそれぞれへの「協力」体制は、ケータイの利用でも確認出来る。優子は子どもの小さなイベント(初

など)の際、俊輔に写真付メールを送ると語っていた。俊輔はそれをネタに帰宅後子どもに話かけたりする。そこには妻から「供給」される育児情報と、それを利用し、妻に協力する(もしくは協力をネグレクトする)夫の姿が見てとれる。

優子のケータイでのメールは、こうした全体の1、2割を占める俊輔とのメール以外は、ほとんど「ママ友」とのメールである。平日、優子は基本的には家で子どもと3人で過ごす。しかし自身で「外が好き」と明言することもあり子どもたちを連れた外出も多い。その外出の受け皿になっているのが育児サークルや育児に関わる妻の個人的な友人関係である。優子は、こうしたママ友[10]とケータイメールを使って、一緒に「おでかけ」する機会のコーディネートや、育児サークルのマネージメントを行っている。

家事や育児で忙しい「育児仲間」と、気楽に連絡を取り合うことを主な目的に、優子はケータイを利用している。優子はこのようなネットワーキング活動に非常に熱心で、少なくとも3つのグループに所属する。関係性も大学や昔の職場の友人から「ママになってからの友だち」まで多様である。このような外部に構築される育児ネットワークが、優子にとって知識面にもアイデンティティ構築面にも大きな役割を果たす。以下に、優子がインタビューの中で語った育児ネットワークへの参加動機を記す。

子育てのためにサークルに入るっていうのはあるんですか?(調査者の発話、以下部は調査者の発話とする。)

優子:そうですね。まあ、子どものためもあるけれど、親がお友達を作りたいだとかね。子どもと家にこもっているよりか、いろんな体験を親子でできたらいいなあと考えていて。家族だけでコミュニケーションをするより外部との関わりがあった方が家族が賑やかになるってのはあるんですか

優子:そうですね、家族は家族でいいけれど、平日っていうのはやっぱり誰もいないので、母と子、そういう時間もあっていいと思うのだけど、ずーっとそれだけっていうよりかは...<中略>

お子さん同士の交流もあると思いますがお母さん同士の交流もあってそこから得られる情報ってすごく貴重ですか?

優子：そうですね。上におにいちゃんおねえちゃんがいるお友達も結構多くて、そうすると「お箸はどうやって覚えさせた？」とか...<中略>...とか、本当に気軽に聞けるので。
<中略>

安心感に違いとかありますか？

優子：そうですね。聞きたいことが聞けるとかいいたいことがいえるとか。

【2006年12月小川家にて】

強調したいのが、優子の育児サークル・ネットワークは必ずしも、物理的な近接性に依らない点である。「近所に同世代の子どもが一人だけなので、隣が公園だが遊ぶ相手がいない」という郊外地区特有の事情もある。しかし、それを差し引いても、「公園」ではなく、「ファミレス」のような地域性の欠落した空間がその拠点とされている。先に述べたように、既存の議論における「育児ネットワーク」では、地域性は非常に重要な要素/前提として存在していた。ケータイの育児ネットワークへの導入は、こうした従来の地域性から育児ネットワークを引き離し『「パーソナルな」育児ネットワーク』を形成するエージェンシーを高めている。一方、このような家族の外部に存在するパーソナルな育児サークルは、純粋な育児から離れたところでの「母親」としてのアイデンティティの獲得に大きな役割を果たしている。すなわち、こうした育児コミュニティはまだ不達者な子どものリアクション以外(すなわち大人の他者)からの自らの母親としての評価を得る事が出来る数少ない場なのである。加えて、育児サークルの活動内容の学習と熟達は、自らの母親としての学習と熟達に置き換えることが可能である。優子も「演劇を子どもと一緒にみるサークル」など、育児の円滑な実行に直接は関係しない趣味的なサークルの中で行われる学習を通して、自らの育児活動における熟達感/充実感を得ていることを示唆する発言をしている。

本事例で見られた母親がケータイを通して構築する「個人的な育児ネットワーク」には、父親のアクセシビリティが低いという特徴もあった。俊輔も上記の「演劇サークル」への参加を拒んでいる。

演劇サークルの方に俊輔さんが行かれることってあるんですか？

優子：うーんないですね。誘ってはいるんですけど、それは嫌だって。 <中略>

俊輔：そういう性格があまり好きじゃないので。

優子：一回行ってみただよね。食わず嫌いはよくないよと思って。で行ってみて雰囲気というかノリというかテンションというかが合わないなって。リーダーというか誘ってくれた人もまあ合わないなっていう。 <中略>

にぎやかな雰囲気なんですか？

俊輔：なんだろ、うん。賑やか。もっと工夫すれば面白くなるかもしれないなあみたいなの口はあるのだけど。なんだろ、安っぽかったの。

優子：一所懸命やってるのにもう。

【2006年12月小川家にて】

この育児サークルに参加する家族でサークルに父親が参加するのは1家族だという。このようなアクセシビリティの低下が起こる背景には、俊輔がこのサークルに歴史的/趣味的な「縁」を持っていないことに加え(妻は昔からの友人の紹介で参加している)、ジェンダー的な障壁の存在も考えられる。端的に言えば、既婚者の異性同士が「プライベートな」ケータイで連絡しにくい文化的風土が日本にはあると考えられる。欧米ではこの問題を常にパートナーを同席させ解決する[21]ようだが、日本にこの習慣はない。この結果、「箱根旅行に五世帯(一緒に産休中の同僚)で父親抜きでいく」「ピューロランドに父親抜きで友だち一家

と車三台連れていく」といった。「父親抜き」のレジャー/子どもとの非日常的体験という実践が、小川家では生まれていると考えられるのである。

4.2 岡田家の事例：スタンドアロンな家族と「母親」になることの困難

先に紹介した小川家は、外部的なネットワークとの接点が非常に豊かな家庭であった。ここでは、その逆である外部的なネットワークとの接点がほとんどない家族のケータイ利用と育児実践について記述してみたい。

岡田家は、関東地方の地方都市郊外部に暮らす3人家族である。世帯年収は300万円台後半で夫の親の援助を得ながら借家に暮らしている。二十代後半の夫、雄也は、自宅から10分の部品工場で運送の仕事をしている。デスクワークとトラックでの運送が半々で、都合がつけばお昼に自宅に食事に戻ることも多い。同僚との酒席などにもほぼ顔は出さず、まっすぐ自宅に帰ることが多い。友人とも最近は会う機会が少なく、趣味は自宅で行うテレビゲームである。インタビューでは、職場では年配の同僚に「子どもが出来てからやる気が違う」といわれたと家族がいることによる「ハリ」を笑顔で語っていた。同じく20代後半の妻さやかは、0歳の子どもと一緒に自宅で一通りの家事をしながら一日を過ごす。子どもが幼いこともあり、自家用車での買い物以外あまり外に出ることはない。友人付き合いもあまりなく地域のママ友もプライベートなママ友もまだいない状況にある。

雄也のケータイの利用相手は仕事先とさやか、さやかの利用相手は雄也/実妹/実母といった具合に、ケータイで連絡を取る相手がほとんど家族内に限られている。この傾向はさやかにより顕著となる。さやかはコミュニケーションダイアリーの記入を依頼した2日間で、ケータイの通話・メールの送受信すべて含めて52件のやり取りがあるが、実妹とのやり取りが20件、夫とのやり取りが21件、実母とのやり取りが1件、他が調査者との調査上の連絡である。これが日常的パターンだと語っていたことを考えても、さやかの社会的ネットワークはオンラインでもオフラインでも一部の親族のみに限られる傾向がある。一方ケータイ上で見られる夫や妹との関係は密で、ケータイで断続的に連絡を取り合っている。コミュニケーションダイアリーの記述を見ると、仕事中でもカミナリが鳴れば雄也はメールでさやかと娘を心配し、さやかは帰宅が遅れた雄也の帰りを待ちきれず帰宅がわかった瞬間に続けざまに「パパ～」とメールを送っている。職場と家という遠隔地にいながら、こういった頻繁でコンサマトリーな側面の強いやり取りを通して、雄也とさやかは非常に親密な空間をケータイ上に構築している。これらのやり取りは、仲島らが若者の友人/恋人間のケータイ利用の分析から指摘した「フルタイム・インティメイト・コミュニティ」[3]内での実践の特徴に合致する。雄也とさやかは、それぞれ仕事と育児をしながらまるで恋人同士のような関係を築いている。一方さやかはケータイの必要性について以下のように答えていた。

さやか：うん、うんと、子どもと二人でいるときになんかあったらすぐに連絡がとれる。だんなに。うん。だから旦那が居れば別に要らないかな。

なるほど。外につながないとなんかあったときに不安？ <中略>

さやか：うん。っていうかあだし凄いい怖がりだから、誰か来たとかなんか変な音がするーとかいうときにかけるよね。

あ、電話かけちゃう？

さやか：うん。仕事のときはメールかな。10連発位。変な人が来たとかいって。

【2006年8月 岡田家にて】

さやかにとって、特に家に子どもと二人で家にいる平日の昼間は、ケータイは自らの情緒的不安を解消してくれる夫や妹・母そのものであり、「家族をポケットの中に」持ち歩いている[22]。しかし、この遠隔

地で構築される親密性は、物理的な距離が近づくと変容を見せる。夫婦喧嘩についての質問に雄也は「大概こう土日平日の鬱憤がでるから。〈中略〉子どもが調子が悪い週はイライラが多いから土日ちょっといやだった。」と答えていた。実は、雄也は家の中では、子どもに対して限定的なアクセシビリティしか持っていない。「いびきがうるさい」と夜泣が心配なさやかに寝室を移る事を依頼され、雄也は壁を隔てた隣の部屋に一人で寝ている。仕事に行く際も子どもを起さぬように、まだ眠っているさやかと子どもを部屋の外から眺め「いってきます」とさやかにメールするのみである。さやかは、自らのアイデンティティを確保する資源を家族・家庭内にしか持たない。結果、家庭内で自分のアイデンティティを構築するリソースを確保する為にそのリソースへのアクセシビリティを厳格に制限する必要が生まれる。両者が家にいる休日、「狭い」家族・家庭の内部に父親・母親が共存できなくなっていると考えられる。その一方、さやかは、テレビの利用に関する「子どもが寝てる時にこれがないと何をしたいのかわからない」という発言からも示唆されるように、家で子どもと2人の時もアイデンティティの構築に苦心している。2人の時は、その関係の中でしか母親としてのアイデンティティを構築出来ないでいるのだ。

この事例で、雄也は外で働き家族のために稼ぐという固有の役割を持っており、外での労働と、家事・育児への「協力」をもって、自らの父親としてのアイデンティティを獲得することが出来る。しかし、さやかは、雄也との間に恋人同士のような情緒的関係を築くことは出来ても、社会的にも物理的にも狭く限られた空間の中で「母親」になることに対してリソース的な困難を抱えている。

4.3 内田家の事例：「親」になるための分担と分担ゆえの役割の衝突

これまで見てきた2つの家庭は、共に夫のみが外部で労働するという「夫は外で仕事、妻は家で育児」という就労形態をとっていた。以下では、共働き家庭におけるケータイ利用と育児実践を詳細に記述してみたい。

内田家は、関東地方の地方都市に住む5人家族である。玄関のみ共用する二世帯住宅に夫の両親と暮らしているが、別棟であり限定的な交流しかない。三十代前半で教師をしている夫の一彰と、同じく教師として働いている夫と同年の妻、由香、加えて二人の子どもである6歳、4歳、2歳の3姉妹が家族のメンバーである。世帯年収は900万円ほどである。二人とも地方公務員である為、一彰と由香の収入はほぼ同額である。家計も2人から同額ずつ拠出される家計用の口座によって管理され、それ以外の収入はそれぞれが独立した口座で管理し利用している。家事の役割分担に関しても話し合いで妻は掃除と料理、夫は洗濯と子どものお風呂/寝かしつけといった具合にかなり細分化されその通りに実行されている。一日の流れも、帰宅時間による変動以外はかなり定式化され、育児と仕事と家事の効率的な両立を図るべく夫婦で話し合っている。内田家の夫婦は互いの独立性を尊重しており、家族をめぐる諸側面で夫婦が平等で均質な役割をこなすことを目指している。いわば、「親」という役職に性別と性格が違う2名が付いている状況である。ケータイ利用に関しては、由香の利用量の方が多い。由香は実母や実姉妹など親族との連絡や、職場や学校時代の友人、夫との連絡など幅広い相手に対して利用している。一方、一彰は、職場関係の連絡と妻との連絡にほぼ利用が限られており、さらに家では、バックの中にケータイを放置している。夫婦間では、メールで1日2、3通、通話は多くて1、2回と程度とそれほど頻繁でない。しかも、そのほとんどが娘の幼稚園の迎えなど、家事/育児の調整であり、岡田家のような親密なやり取りは見られない。

幼稚園の迎えは、原則どちらが迎えに行くという事も決まっておらず、「先に仕事が終わった(終わる目処がついた)方が迎えに行く」という決まりになっていた。その為、どちらも仕事が終わらない場合、ケータイを介して「どちらが迎えに行くか」という「駆け引き」が盛んに行われていた。先に連絡した方が迎え

に行くという暗黙の了解が夫婦にはある為、お迎えに行くための限界時間である17:15頃からのケータイ上の「沈黙」によって交渉は始まる。この交渉は互いの「貸し借り」の状況を鑑み、どちらかが「折れる」ことで完結する。しかし、状況によって、この交渉はまったく別な形になって発現する。コミュニケーションダイアリーを記録していた2006年8月の休日、16時半の子どもの迎えは自分が行くと言って一彰は朝から趣味の用事に車で出かけていた。その用事が長引き、由香に16時半に間に合わないかも知れないという連絡を16時頃ケータイで入れている。これに反応し由香は子どもを迎えに行ったのだが、一彰はその由香の行動に対して「意外と道がすいてて4時半には保育園に行けたんだけど、俺が行けたのに。迎えに行くって言ったのに」と、一見理不尽とも言えるコメントを述べている。つまり一彰と由香は、仕事のあつ日は、ケータイで「お迎え」を「押し付け合い」、仕事のない休日は「競い合つて」つているのである。状況により、ケータイ上での交渉も変化を見せている。こうした状況の変化から解釈されるのは、仕事と家庭の両立に苦心し「対等」な関係の中で限られた「親」としての役割を競い合う夫婦の姿である。こうした夫婦の姿は「写真付きメール」の中に先ほどの小川家とは異なる形で見て取れる。

(写真付きメールをどういふときに送るかという質問に対して)

由香：ディズニーランドのときも送つたかな。旦那は行けなかつたので。

一彰：そう。置いてかれたんですよ。

由香：ま、そう人聞きの悪い。

子ども：一緒に行きたかつた？

由香：ほら、子供がフォローしててじゃない。別にねえ、誘つてないわけじゃない。仕事があつたんですよ。

ほら、本当はねえ、大人2人いた方がいいじゃない。〈中略〉

(写真付きメールを送られて喜んでいふかという質問に対して)

由香：喜んでるのかねえ？ 気になつてみたいでね。

【2006年8月 内田家にて】

内田家でも、母親である由香は「夫抜きレジャー」に出かけていた。妻は、その日も仕事だつた夫を気遣つてか、その場の様子を写真付きメールで報告している。それに対して、父親である一彰は反発を見せたようである。結局、なぜ家族全員でいける日にしなかつたのか、その後話し合いになつたと語つていた。

家庭内の役割が重複する内田家の場合、親としてのアイデンティティをより強固に構築する為には、育児実践においても何らかの差異化を図らなければならない。日常的な育児実践で平等に仕事が割り当てられていたとすれば、差異化を図れるのは、子どもへのアクセシビリティの直接度か、非日常的な子どもとの体験の頻度になる。役割の差異化の視点から考えれば、妻から一方的に提供される「写真付きメール」といふ「思い出の断片」は、自らの父親としての立場を周辺部に追いやるものであり、夫にとっては素直に受け入れ難いことも理解できる。

小川家で紹介した写真付きメールのやり取りの事例とほぼ同じ状況であるにも関わらず、夫の反応の仕方が異なるのは、役割関係の構築方法の違いが背景にあると考えられる。俊輔には妻の写真付きメールという申し出に対して、明確な協力を表現するか無視をするかという選択肢しか存在せず、内田家のようにそれに対して反発するという選択肢はない。明確な役割意識を背景に、それで十分自らの父親としてのアイデンティティの獲得状況を調整可能なのである。一彰はインタビュー中に「子供達はもう御飯食ひ

終わって別のことしてるときに俺が食べて、みたいなかんじだから。御飯は一緒に食べたいなって思ってるんですよ。〈中略〉一緒にいるけど別のことしてるから。やっぱ違うじゃないですか？」とも語り子どもとの直接的な接点の少なさを指摘する。

直接的な育児体験へのアクセシビリティという側面からみれば、父親である一彰と母親である由香の間には明らかな差異が2点存在する。第一に男親である一彰には娘たちと協働で行う実践が非常に限られること。第二に子どもとの実践を支える外部の育児コミュニティとのコネクションが限定されることである。

1点目に関していえば、子どもが「娘」である事が非常に大きなインパクトを持っている。由香が、女性性を強く持つ実践を数多く提供でき、実際に提供しているのに対して、一彰には、女の子である娘と一緒に取り組む事が出来る実践を提供することが難しい。インタビューの際も、由香は子どもたちを飽きさせない意図もあったのか、家にいた長女と次女と一緒に夕食のカレーを作っていた。一彰は、この様子を見守ることが出来ても、口を出したりアドバイスしたりする事は許されていなかった(実際に発言は流されていた)。子どもとの実践から父親である一彰を遠ざけるエージェンシーを持つ布置は家庭内の各所に見ることが出来る。前述の、一彰の不満の要因となっていた食事の流れも、かわいらしいピンクを基調にしたおもちゃやリビングルームの装飾も、娘たちが夢中のファッションゲーム「ラブandベリー」も、父親のアクセシビリティを低下させるジェンダー的な障壁となりうる。子どもとの実践を夫婦どちらの歴史性や文化性に依ったものにするかは、こうした「役割の競い合い」の中では、各自のアイデンティティの構築にとって非常に重要な要素となるのである。

2点目については、内田家では小川家と同様、由香が子どもを持つご近所や過去の友人と積極的に連絡を取り、育児に対する情報交換や愚痴こぼしを行う一方、一彰にはパパ・ママ友といえるような友人が存在しない。加えて、これも小川家と同様に一彰は由香が持つ「個人的な育児ネットワーク」にアクセシビリティを持たない。つまり一彰は、岡田家のさやかのように父親としてはスタンドアローンな状況にある。この状況下では父親としての外部的な評価や達成の実感を得難い。アイデンティティの獲得には一定の制約が付く。結果、一彰の「楽しみ」は、大好きな車と接することか、洗濯物を畳みながら聞くラジオといった一人で楽しめるものになっていた。

こういった父親としてのアイデンティティの獲得を考える上で、興味深い事例がある。中学3年生の娘を持ち、平日だけ単身赴任をしている40代後半の営業支店長、剛史の事例である。彼は、家に帰らない平日も娘と頻りにメールする。家に帰れば会話も多い。そのメールや会話の中心となるのが、親子でファンであるプロ野球チームやサッカーチームの話題である。剛史はファンクラブ仲間から、試合の情報をケータイで聞きつけその観戦に行くかどうかを娘に連絡する。娘が行くと返事をすると、剛史は試合の子ケットを取り待ち合わせ場所や時間等の連絡を娘のケータイと取り合う。これは、中学生の娘と父親との関係の事例であるが、その基盤は幼少期からの父親の趣味ネットワークへの娘の参与である。こうした個人的な外部ネットワークへの子どもの参与は、母親であれ父親であれ、子どもとの非日常的体験の構築＝「親」としてのアイデンティティの構築に積極的に関与する。

5. 結論

5.1 育児/家族の外部性

「育児」とは、子を産み育てるプロセスであると同時に、参加者が(多くの場合父か母としての)社会的アイデンティティを獲得するプロセスでもあるという解釈の多義性を持った実践である。ここで言う「育児の外部性」とは、こういった多義的な性質を持つ「育児」の達成が、従来の物理的/制度的空間の内部に閉じた「家族」枠組みの中では完結しない可能性を持つことを意味している。

この「育児の外部性」は、妻が家族外とのパーソナルネットワークを豊富に持ちそこから母親としてのアイデンティティを積極的に構築している小川家と、逆に妻がほとんど外部的ネットワークを持たず家庭の中だけでアイデンティティを構築しようと苦闘している岡田家と対比や、内田家内部での外部的接触を豊富に持ちその活用により夫とのアイデンティティの競い合いで有意に立つ妻と、外部的接触を余り持たないがゆえに苦戦する夫との対比の中で、浮き彫りとなってくる。(内田家の場合は、後述の実践への参与障壁も大きく影響している。)

これらの事例からも描き出されるように、ケータイの日常的領域への浸透は、これまで家族/家庭という私的領域を前提に考えられていた育児を、公私を分ける家族という文化的な障壁/家庭という物理的な境界の内側に閉じた実践として理解することを難しくしている。先行研究で触れた既存の育児ネットワーク論で議論されている母親 家族 地域といった固定的な構造の中で理解することもやはり難しい。家庭内にいると考えられてきた「父親」「母親」の存在は、もはや家庭内だけで捉える事は出来ない。家庭/地域空間や家族/近隣同士の関係性と、個々人が歴史的・文化的に構築してきた場所性に依らないパーソナルネットワークがハイブリットに結合された空間の中に認識されるものとなっている。「育児ネットワーク」はすべて個人の手で過去から築き上げてきたネットワークで構成されると主張しているわけではない。そしてその過去から築き上げてきたパーソナルネットワークがすべて育児で活用されると主張するわけでもない。当然、地域性の強い育児コミュニティや、育児を始めた事によって形成される育児コミュニティも存在する。また、本論は松田[23]が主張する結婚や育児期における、文化的/時間的/空間的制約からパーソナルネットワークが縮小することを否定するものでもない。しかし、ケータイのようなモビリティを持ち、隙間の時間に利用可能なメディアが普及した今日、少しの努力で維持できるパーソナルネットワークの紐帯を理由なく「すべて」消滅させることには返って合理的な理由が見つからない。以前からの友人で、同時期に同じライフステージを体験している人間がいれば、関係性の中に内包された歴史性に共時性が加わり、紐帯は強化される可能性すらあるのである。ケータイの利用は、育児実践を、参加者が個人的に構築しているパーソナルネットワークと不可分な存在として浮かび上がらせる。

5.2 育児におけるジェンダー的な競争と衝突

本論において中心的に記述を行った3家庭の内、育児実践に妻のパーソナルネットワークが深く浸透していた小川家/内田家で見られたのが、ケータイの活用を通して形成される妻のパーソナルな育児ネットワークへのアクセシビリティが低下した夫の姿である。小川家の夫の「趣味が合わない」という言葉が象徴するように、個人が歴史的に形成してきたパーソナルネットワークは、趣味的な嗜好の違いやジェンダー的な規範など、歴史性を持たない他者の参加に対して多くの障壁を持つのである。この障壁は、妻のパーソナルネットワークを基盤に行われる育児実践への夫のアクセシビリティの低下を生み、夫の育児への参与を周辺へ追いやる要因となっている。

伝統的なジェンダー論的立場[24]からは、こうした子どもへのアクセシビリティの不均衡は性役割の不

平等として捉えることが出来る。しかし、本論の個別具体的視点からは、このような固定的な「見え」は否定される。このパーソナルな育児ネットワークを基礎とした育児実践から周辺化される夫の姿は、育児実践全体をめぐる技術社会的[20]な布置と、その視点の違いにより異なる形で翻訳可能である。例えば、写真付メールは、明確な役割関係を持つ小川家の夫婦にとっては、この周辺化は既存の役割を再生産するツール[11]となり、役割が重複しアイデンティティを競い合う内田家にとっては、この周辺化は、競争意識を強め衝突を引き起こすきっかけとなる。同じメディア/コンテンツでも、導入される文脈が異なればその意味もまた違ったものになる。

役割上ある程度の均衡を保つがゆえの内田家に見られたこの育児活動を巡るジェンダー的な役割の競争と衝突は、今後の育児実践を巡る夫婦関係のあり方に重要な示唆を与えていると考えられる。これまでも、育児におけるジェンダー的な衝突は数多く議論されてきた問題である。しかし、それは父親/母親の役割が規定された上でのその役割の不履行や、もしくはその役割自体の不平等を論じたものであった。本論で議論されたジェンダー的な衝突はこのいずれとも異なる。役割がある程度均一であり、互いに役割を果たそうとするがゆえにローカルなレベルで生じる役割の「競い合い」である。参加障壁を持つパーソナルネットワークの育児実践への導入は、この「競い合い」の中での「援軍」としても解釈可能である。本論では、主に女性、すなわち母親が持つパーソナルネットワークの育児実践への導入について議論してきた。しかし、剛史の事例が示すように、男性が持つパーソナルネットワークも同様のエージェンシーを持つと考えられる。もし、育児実践上での役割の均一化を社会的に図るのであれば、育児実践を通して父親/母親が安定したアイデンティティを構築する為には、男女双方が育児期以前から安定してパーソナルネットワークを構築していけるような社会的デザインが今後必要となるだろう。また、ジェンダー的障壁が少ない育児ネットワークを実現することも重要であると考えられる。これには、物理的的近接性を理由に、比較的男女の別なく参与可能である地域社会を基盤としたネットワークの重要性を再認識し、地域性から離れたパーソナルなネットワークと並存をさせていく仕組み作りなどが求められると考える。

6. 議論

6.1 私的領域と公的領域を跨ぐ実践共同体: 家庭における二元論的メディア消費モデルの修正

ここまでの育児におけるケータイを中心としたメディア消費とそれを介した家族の構築について議論を進めてきた。ここまでの議論には、少なくとも議論を始める前の段階では1つの暗黙の前提条件が存在していた。それは、「家族/家庭」という共同体はあらかじめ存在し、その一員として父親・母親の存在があるというものである。しかし、先にも述べたように、ケータイを活用した育児実践を焦点に見た父親・母親としてのアイデンティティの構築は、このような従来のな共同体の内部に完結しない。ここに一つの疑問が生じる。家庭/家族におけるメディア消費や実践を理解する枠組みとして、概念枠組で述べた、公的領域と私的領域としての家族/家庭を峻別する従来型のモデルは、モバイルメディアが普及した今日においても果たして適切なのであろうか。

この問題は、どちらが家族の真の姿かといった「真実」を求める問題ではない。どのように認識すれば、より適切に現実を理解出来るかという「モデルとしての合理性」の問題であると考えている。合理性という観点から見れば、見知らぬママたちの間に飛び込む「公園デビュー」[25]という言葉が象徴するような参加者の社会関係/ライフステージにとって非連続的な実践としての育児[10]が、一般的である限りは、公私の二元論、すなわち制度的な構造としての家族を前提としたモデルは、一定の妥当性を持っていたと考えられる。しかし、本論で行ってきた記述は、「育児期以前からの連続的な(歴史性を持った)実践と

しての育児」を浮かび上がらせる。もちろん、育児の「不連続な側面」が、すべてなくなったということを議論しようとしている訳ではない。「不連続な側面」が大半を占めていた育児実践の中に「連続的側面」が導入されつつあるということを議論しているのである。しかし、このような変化が起こることによって、二元論モデルは汎用的なモデルとしての合理性を失う。

このような二元論への疑問に対して、本論で解決策として提示したいのが、従来の家族/家庭におけるメディア消費モデルの公的領域と私的領域の仲介者として、レイブとウエンガー(Lave and Wenger)の実践共同体(Community of Practice)の概念¹⁾[26]を導入することである。本論で記述してきた、育児ネットワークは、育児実践を中心に形成される実践共同体であるとも考えられる。このような実践共同体と、それに複数参与し動的に共同体自身やその価値体系を構築しているコミュニティを身にまとったハイブリッドな個人を、公的領域と私的領域を行き来する存在として捉えることで、私的価値観と公的価値観という二項対立を廃し、メディア消費の背景となる複数の価値観や歴史性の交渉のプロセスをより緻密に理解することが可能になると考える。従来の二元論的モデルの中では、公的領域と私的領域は、ただ「つながっている」だけであった。その間に公的領域と私的領域を跨ぐ、実践を中心に形成される実践共同体の存在を想定する事で、家庭内のメディア利用を介した意味の構築とその流通をより詳細なレベルで捉える事が出来る。

本論における議論は、制度としての家族を否定するものではなく、あくまでローカルな実践レベルでの人々のメディア消費の理解を目指したものである。ゆえに個別具体的な記述を中心とした議論であり、一般論を語る為にはその為の方法論に基づいた議論を待たねばならない。しかし、一般論を語る上での可能性も見えにくい多様な社会において、本論のような現実の可能性を探求し議論する研究にも一定の価値があるものと確信している。また、本論は、家庭内で行われる物理的ケアとしての育児活動の重要性を決して軽視するわけではない。しかし、物理的なケアと今回中心的に論じた親としてのアイデンティティの構築は不可分な両面である事もまた事実である。両面の重要性を理解しつつ、その問題を同時複合的に解決していく為の施策が今後求められると考える。

付 記

本研究の基礎となった調査は、筆者が共同研究者となっている(財)電気通信普及財団の研究調査助成によって実現したものである。ここに感謝を評したい。また、本論文を執筆するに当たり多大なご指導を頂いた、慶應義塾大学環境情報学部の小檜山賢二教授、同学部の加藤文俊准教授、同大学政策・メディア研究科特別研究教員の岡部大介氏にも、この場を借りて感謝の意を表したい。

【注】

1) コミュニティ・オブ・プラクティスとはジーン・レイブとエティエンヌ・ウエンガーを中心に開発された概念である。「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」[27]と説明される。実践と学習を基盤にしたインフォーマルな社会集団である。

【参考文献】

- [1] TCA: 事業者別契約数(平成19年3月現在), <http://www.tca.or.jp/japan/database/daisu/yymm/0703matu.html>, 2007.
- [2] 富田英典: 若い世代とメディア環境, マス・コミュニケーション研究No.52:49-66, 1998.
- [3] 仲島一郎 他: 携帯電話の普及とその社会的意味, 情報通信学会誌vol.16(3): 79-91, 1998.
- [4] 辻泉: 携帯電話を元にした拡大パーソナル・ネットワーク調査の試み, 社会情報学研究No.7: 97-111, 2003.
- [5] 斎藤嘉孝: 家族コミュニケーションと情報機器, 情報通信学会誌vol23(2), 2005
- [6] 山田昌弘: 迷走する家族, 有斐閣, 2005.
- [7] 落合恵美子: 育児援助と育児ネットワーク, 家族研究 創刊号:109-133, 1989.
- [8] 厚生省人口問題研究所: 現代日本の家族に関する意識と実態, 厚生統計協会, 1996.
- [9] 松田茂樹: 育児ネットワークの構造とそのサポート力, 家族研究年報, vol.27, 2002.
- [10] 宮木由貴子: 「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割, Life Design Report 2004.2, 第一生命経済研究所, 2004
- [11] 土橋臣吾: 家庭・主婦・ケータイ, 松田美佐 他 編: ケータイのある風景, 北大路書房, 2006.
- [12] Wajcman, Judy: Feminism Confronts Technology, The Pennsylvania State University Press, 1991
- [13] Gershuny, Jonathan: After Industrial Society, Macmillan, 1978
- [14] Oakley, Ann: The Sociology of Housework, Martin Robertson, 1974.
- [15] Cowan, Ruth S.: More Work for Mother, Basic Books, 1983.
- [16] クロード・S・フィッシャー: 電話するアメリカ, NTT出版, 2000.
- [17] Silverstone, Roger et al. ed.: Consuming Technologies, Routledge, 1992.
- [18] Morley, David: Family Television, Comedia/Routledge, 1986.
- [19] Spigel, Lynn: Make Room for TV, The University of Chicago Press, 1992.
- [20] 伊藤瑞子 他: テクノソーシャルな状況, 松田美佐 他 編: ケータイのある風景, 北大路書房, 2006.
- [21] 山田昌弘: 新平等社会, 文藝春秋, 2006.
- [22] Amagasa, Kunikazu: Family and Home Space in Mobile Era,
http://amagasa.info/kunikazu/output/family_and_home_space_in_mobile_era.pdf, 2006.
- [23] 松田美佐: ケータイ利用に見えるジェンダー, 岡田朋之 他編: ケータイ学入門, 有斐閣選書, 2001.
- [24] 船橋恵子: 育児のジェンダー・ポリティクス, 勁草書房, 2006.
- [25] 本山ちさと: 公園デビュー 母たちのオキテ, 学陽書房, 2006.
- [26] ジーン・レイブ, エティエンヌ・ウエンガー: 状況に埋め込まれた学習, 産業図書, 1993.
- [27] エティエンヌ・ウエンガー 他著: コミュニティ・オブ・プラクティス, 翔泳社, 2002

